

# 三河アララギ

平成二十六年

二月号

第六十一卷 第二号



## ニューヨーク日記(88) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

August 10, 2013 : Bar Nestor's Chuletón

## Blue Shoe Diaries



ちよっとお昼! チュレトンの美味しいバルを聞いて行ってみました。バルの外にあるテールで立ち食い! まずはトマトサラダ。シンプルに季節のピークのトマトに美味しいオリーブオイルと塩だけ。これ、止まらなかった! 大きなお皿いっぱいペロリ。ステーキが来るのを待っている間に獅子唐(みたいな)をパクパク。っでかんじんのチュレトン! デカイ! いい感じに油もってるでしょ。ピッタリの焼き加減&塩。絶対食べきれないなと思ってたけど。。。2人で食べちゃった! このお店気に入った!

Lunch time in San Sebastian. Ventured out to a tiny spot called Bar Néstor on a street called Pescadería. Here, they are known for their chuletón which is a flintstone size ribsteak. They let the beef do it's thing and is just perfectly seasoned. Perfectly. It comes sizzling and you can let it cook more if you like your meats cooked through (I don't). The whole giant of a steak disappeared so fast! I didn't think it was possible to eat the whole thing but when something is so tasty, it's just hard to stop! On top of that, they have this out-of-this-world tomato salad that one just simply cannot stop eating. Big plateful of ripe tomatoes bathed in the best olive oil and salt. Heaven! The flash fired pimientos verdes de Gernika were perfect too. Oh and did I tell you the staff is amazing too? I love this place!

# 目次

## 第六十一卷第二号(通卷七二二号)

表紙 福寿草	今泉 由利 (1)
ニューヨーク日記(88)	Blue Shoe (2)
感銘歌 御津磯夫第十歌集	大須賀寿恵 (4)
歌集「スモン」	岡本八千代 (5)
忘れ花	今泉 由利 (6)
大和盆地	弓谷 久子 (7)
手塩に	青木 玉枝 (8)
朝のはじまり	内藤 志げ (9)
師走の向日葵	佐藤 喜仙 (10)
虫ぼし	安藤 和代 (11)
松ぼっくり	林 伊佐子 (12)
冬の山里	伊藤 忠男 (13)
三千世界	胃甲 節子 (14)
柀	鈴木 孝雄 (15)
富岳	森岡 陽子 (16)
こもり柿	足立 晴代 (17)
木枯らし	小柳千美子 (18)
リング	富岡 和子 (19)
羽子板市	清澤 範子 (20)
春を待つ	半田うめ子 (21)
幸せなりぬ	近藤 映子 (22)
冬来たり	杉浦恵美子 (23)
五井山	平松 裕子 (24)
雲間より	山口千恵子 (25)
バックネル大学	小野可南子 (26)
「ひつつぎ虫」	夏目 勝弘 (27)
年末雑感	(28)

路面電車	うま年	光を放つ	贈呈誌	『歴代天皇御製歌』(二十一)	『ことよせ』	『俳句』	『かさね』の一句 一月号	私の一首	ある自然科学者の手記(21)	絹の話(39)	物理学者と詩歌の世界(49)	短歌に詠まれた茂吉	楽しい時間(15)	富士山の短歌革新とアララギの歌人(19)	「水魚」のことから(157)	ことのはスケッチ(422)	編集室だより(二〇一三年十二月)	和菓子街道(88)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定
------	-----	------	-----	----------------	--------	------	--------------	------	----------------	---------	----------------	-----------	-----------	----------------------	----------------	---------------	------------------	-----------	--------------------

秋山 逸穂 (29)	阿部 淑子 (29)	白井 信昭 (30)	貫名海屋資料館 (31)	いーはとぶ (32)	植村 公女 (33)	一石 (33)	鈴木 孝雄 (38)	内藤 志げ (38)	夏目 勝弘 (39)	林 伊佐子 (39)	大橋 望彦 (40)	今泉 雅勝 (42)	一石 (44)	鮫島 満 (46)	山本紀久雄 (48)	佐藤 喜仙 (50)	夏目 勝弘 (51)	岡本八千代 (52)	今泉 由利 (53)	平松 温子 (56)
------------	------------	------------	--------------	------------	------------	---------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	---------	-----------	------------	------------	------------	------------	------------	------------

## 感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

短日をもてあましつつ松の間の楓紅葉の黒く暮れゆく

寒かりし一日の光うすれつつ墓はかはながら華殻を焼くけぶり流るる

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

両足に麻痺あることを常として復職審査の事務に暮れゆく

この母心を千人の子にも持ち給へと吾は話の結びとしたり

一葉づつ鉢のノボタン紅葉してわが撒く如露の水に落ちゆく

## 忘れ花

蒲郡 岡本八千代

花終はりまた花咲きたり木瓜の花くれなる惚ほうけし忘れ花二つ  
返り花を忘れ花ともいふを知るわれはだんだん君を忘れつつ  
花さへも季を忘れて咲く花よ忘れたき事忘れてゆかむ  
ついに独り住まへる君の高き塀今年も赤し蔦かづらの葉  
いつしかに元氣印の洗濯物干しある時の少なくなりし君  
夫の個展年明けにして朝も昼も夫は二階より下りては来ずに  
題名を「蝶の舞」とかに決めたらし個展の案内状五百枚届く  
ひとすぢに絵の勉強の六十余年夫は米寿を一つの区切りか  
口出しをせずに観てをり並べたる百点余りの夫の油彩画  
大木たいのわが合歡の木をつひに伐る哀しくも塩の花をふりつつ

## 大和盆地

東京 今泉 由利

三日月の月の光りに頼りつつ私の家の鍵掛けむとす

豊穰と安穩祈る聖地にて神坐みわにますひむかい日向神社

味酒の神と通はす心して御神酒いただく大神神社

三輪山にま向ひ二拝二拍手一拝の間静かに静かに山に融けゆく

いま冬の松杉桧のま緑の神の鎮もり大神神社

万葉集に知りたる地名は快速に走り抜けゆく大和盆地

初雪に屋根屋根白いスパイクの付きたる靴を履きていでゆく

山裾に鈴成り黄金こがねのキラキラとみのりの黄金みかんの黄金

南天の一粒づつの赤き実の一粒づつの氷の滴

奥多摩の湿度が全て凍りつき真白の景色歩みゆきゆく

## 手塩に

豊川 弓 谷 久 子

色あせし庭菊すべて刈り取りぬ菊の香ほのかに漂ひてをり  
我が秋を楽しませ呉れし菊の花刈りて束ぬる残り香を手  
に  
ケーキを前に笑顔のシヤメが届きたりみさと十八歳に今日なりぬ  
手塩にかけし幼なき顔と重ね見る十八歳にみさとはなりし  
敗戦が真近とも知らず工廠に働きてゐし我が十八歳よ  
来年の日記帳届きぬほそぼそと又書き続けむ老いの繰り言  
玄関にしわみし柚子の実十ばかり置かれてゐたり冬至真近し  
解体工事の音に怯えてこもりをり古き隣家こわされて行く  
払いても拭きてもきりなし隣家の解体工事に舞ひ来るほこり  
孫が読み子が読み今日より我が読む本屋大賞「舟を編む」



## 朝のはじまり

新城 青木玉枝

山里にふたたび冬の訪れを肌に沁む風冬陽の下に

碧空も雲にかくれて冬の日の足許もとに一つ木の実の落つる

朝六時部屋に暖房入りたり着替も楽に朝のはじまり

足なへて杖と手押車の明け暮れは夢もなき今師走しわす月も後わずか

生きている印しるしの如き雑音の都会の生活たつきに帰りたい今

自分から好んで来た地山里に今更悔いても帰る日は何時か

老いたれば安らぎだけが希望のぞみなり年の瀬となれば尚更のこと

わが頬に枯葉一枚飛んで来て仲良く坐る庭のベンチに

冬の風頬に伝わる冷たさを日向ポッコに陽のあたたかみ

新聞を一時間かけてゆつくりと今日の始まる豊かな心に

## 師走の向日葵

豊川 内藤 志げ

見上げ見る紅葉は黄に紅に空の青きに彩り透す

赤に黄に緑を映す川の面の清みし淀みにしばし佇む

県民の森の斜面を馳ける孫を叱りしは遙となりぬ

里芋の一株つつを穴に伏す里芋軽し穴も小さき

道に沿う軒の日向に九月半ば師走の花と向日葵をまく

芯までを黄に咲きたる向日葵を廻り道して見に来よとわれ

作業場の軒の向日葵眺めつつ葱を束ぬる部屋内ぬくし

時をりに葱を束ねる手を止めて黄鮮やかにひまわりの花

口数の少なき小女が花に触れきれいと云えり笑みてうなづく

細く立つウツギの黄葉は庭隅に炬燵に入り眺めてをりぬ

## 虫ぼし

東京 佐藤喜仙

動物の死見とどけるは悲しけれども我が家の愛犬なれば

古稀むかへ返り見たれば手術痕背中に二か所腹部六か所

気がつけば子規の倍生き数か所の手術痕あるも手にはぬくめ酒

早朝の秋空に鴨渡り来る今日こそ我の退院する日

秋刀魚焼く煙くりやに立ちのぼり心の中にみちのく思ほゆ

早朝の散歩はいつも同じ道会ふ人もまた同じ人々

秋の浜砂に足跡深かりし夏の喧噪今やはるかに

台風の過ぎし夕べの名残風茜切り裂く早き黒雲

のびやかに風うけ流す秋桜あいつとおれの確執深し

捨て切れぬ父の数冊虫ぼしす読むといふこと無きこと知りつ

## 松ぼっくり

豊川 安藤 和代

軒下に光るは冬の陽を受けて主なき蜘蛛の糸がゆれをり  
鍋焼きのうどんの昼餉会話なき夫とであれど心温くぬく

振り向けば誰かがついて来る様なふり向けば唯枯葉一枚

稲荷の森に遊び心で拾ひたる松ぼっくりをお守りとする

とよ川の加茂橋渡れば幼な日の船頭さんの笑顔の浮ぶ

男孫のスニーカー並ぶ玄関に秋草二鉢華やぎを置く

意志などはなきか枯葉は北風にくるくるカサカサ運ばれてゆく

バアチャンの手作りハンバーグ食べる時わんぱく外孫の輝く笑顔

悩みある友を帰して冬の夜の星のまたたきまぶしく見つむ

若き日に富士に登りしを語るれば「本当？」と孫は目を丸くする

## 冬の山里

岡崎 林 伊 佐 子

登りゆく山の小道の木漏れ陽に竜胆野菊が色褪せて咲く

山風に吹き上りたるもみぢ葉は意志ある如く狭間に彷徨ふ

錆色のこまかき落葉が山道に追ひつ追はれつまろびてゆきぬ

榲の実を「このみ」と呼びて食用に食みたる昔の自然おもふ

榲の木の根元に残れる鹿の跡木皮あらして何処にひそむ

杉木立に包囲されたる里の家夕ぐれ早き冬の短日

鈴成りの柚子の実とりて冬至の夜風呂にいたる慣わし守る

喧騒も訪ふ人もなき山里に気ままに過す日々の安けさ

福寿草のつぼみかたしも玄関の日向に置きて正月を待つ

耳廢の吾に答へる孫たちの首振ることも会話のひとつ

## 三千世界

大阪 伊藤忠男

大きさに紛れ大きき分かるまい針も棒にて砂も岩なり

大仏の功德あまねく行き渡る三千世界とはどこの国

遠き空近くに見える三日月の映る水面は猿沢の池

木枯らしに耐えて忍ぶか枯れ木にもたった一枚残る木の葉が

静かなる日々が過ぎゆく師走なり秘密秘密と皆口閉ざす

平和な世危うさ誰も気が付かぬ聞かぬ言わざる我が国だとは

地震国突風豪雨追い打ちをおまけに汚染海に広がる

何言えど我が国自由が誇りにて今日はけんけん明日はがくがく

病聞き気もそぞろにて明けた年年の瀬なりてやっと笑顔に

威勢良くマグロをさばく市場街今年も暮れるこの掛け声で

柗

豊橋 胃 甲 節 子

柗は今真盛り可憐なる白く小さき花も香りも

視力落ち眼鏡新調する事も無きまま仰ぐ満月ぼやけぬ

タクシーで八時に家を出でたるも採血の順番はもう百十二番

病院の支払ひも機械の指示通り順番にボタンを押しつつ可笑し

診察券使はず機械はバーコード読み取りで忽ち処理は手速し

朝の鏡に写る鴨早咲きのピンクの椿をせつせと啄ばむ

雪降らぬ故郷の松山十一月に雪降つてると妹は言ふ

弓張の山のおちこち湧き上る真白き雲の今朝は絵のごと

束の間の速さに過ぎて師走とは二つ同時に出来ず気が急ぐ

新らしき年の吾が日々変り無くどうか短歌を詠めますやふに

## 富岳

沼津 鈴木孝雄

九五のおじいさんと風呂談義先の戦争昨日のように

下部の湯老いた夫婦が肩並べ温泉文化は守りたきかな

本栖湖を抱え聳える富士山を千円札と比べ悦に入る

西の空三日月と並び金星が暗くなりゆく富岳見送る

早起きし朝焼けの富士山撮らむとて海に向かへど雲に隠れる

遅蒔きでもう駄目かなと案ずれどハウレンソウの双葉の芽

ブロッコリーの房に潜める青虫に寒に備えよと促されけり

冬至空磯菊が黄の花咲かす自然の花の遅しさかな

ホトケノザ周りの草は枯れたのに寒さいとわず紫の花

二ヶ月ぶり母をホームに訪ねけりご無沙汰詫びる希望の買い物



## こもりの柿

東京 森岡陽子

昼時分<sup>ひるじぶん</sup>テレビに写る我友の歌声聞くは楽し<sup>たの</sup>し<sup>し</sup>も

店頭に赤き実つけたる南天は難をよけると新年用と

学食で食べたランチに驚くはうまさと安さとメニューの多さ

柿もみぢ桜もみぢに銀杏の葉キャンパス一面赤色黄色

山里に一本立ちし柿の木のコもりの柿を夕日が照らす

公園の入口に咲く返り花季節ずれても堂々と咲き

食堂で関西風か関東か質した答えうどんにかかり

友人と学生時の寄り道の何時もの甘味屋久しぶりに

浅草の師走の寄席に足運び笑って帰る寒い寒い夜

愛犬は日差し求めて移動をし仲良く昼寝いびきも聞え

## 木枯らし

東京 足立晴代

木枯らしの樹々の葉舞いて土の上へに高き小枝に残りし木守  
舞い落ちる樹々の葉風に流れゆき宮参りするおきなこ幼児さむし

早々と白き衣の冬將軍寒さきびしき北国の冬

冬ばらの淡あわきピンクも寂しげに薄うすき陽ざしを求め咲きけり

舞う落葉色とりぐにふるえつゝ師走の町を走りゆきけり

Xマスイルミネーション輝きて華やぐ若人高き声

みなこぞり待ちし彗星いづこにか幻まぼろしのごとく夢と消えゆき

日めくりも残り少なくなりし日々過ぎたる想い出なつかしむなり

花束の見事なばらをいかにして永く咲かせむ吾がたのしみ

白雪ゆきをまといて気高き富士の峰駿馬しゅんまの如くのぼり行きたし

## リンゴ

東京 小柳千美子

成りすぎしリンゴの枝の折れにけりリンゴころろ笑ふが如し

滝のぞむ紅葉明りの蕎麦屋あり並ぶ自然薯掘り立てと言ふ

朝露の湖にただよふ蜷船長者なりしは今昔と

堀川を巡る遊覧船のあり船頭歌へば鶉の鳴きにけり

昼下り社の森の日溜りに少女がひとり猫とたわむる

冬ざれの不忍池鎮まりてほのぼの点るスカイツリー

伊勢巡り離れ小島に宿とれば別れの朝赤き肩巾振る

山里の白鷺遊ぶ隠れ田に危く傾ぐ稲架のあり

秋晴れの光あふるま天守閣大山は早や雪を纏ひて

用もなくかける電話の増えにけり古里遠く父母老ひませば

## 羽子板市

東京 富岡 和子

足下もイルミネーション煌々とツリー大きく新月の銀座

浅草寺スカイツリーと満月と手打ちのつづく羽子板市を

おとなりの大きく赤い冬のバラ女主人<sup>あるじ</sup>米寿を元気に迎え

ひさかたに訪ね来たりぬ八王子七色虹のさやかにありぬ

友見舞う治療のあとの自宅居間ヒヤシンスの香笑顔の似合い

暮の庭剪定のちも捨てがたく<sup>もっこもみじ</sup>木斛黄葉西洋壺へ

キッチンのクリスマスツリーはしゃぐ兎らハンバーグ焼きぬ昔の夕べ

変えてみる調理の手順肉ジャガのテレビがコーチおいしく早い

安心と朝の入浴ミストなか早起きニュース初雪知らず

増えてくる手抜き掃除の終い<sup>しま</sup>月あさの日射しに背中押されて

## 春を待つ

春日井 清澤 範子

剪定せし椿の花芽あちこちに着きて春待つうれしくなりぬ

娘のヘルニアは保存療法と決りたり点滴の落つるを見つめるかな

吾が背丈越えて東西南北に花を着けたり百日紅は

神社の舞台に吾座しをれば会釈して詣でる人あり吾の後に来て

八王子神社に詣で夫と並び願ひ多く祈り祈りて

隣家のバラの花園美しき花びら舞ひて吾が側溝に

前立腺の採血検査にバスに乗る変りなきこと祈る思ひに

弟は三年振りにたづね来てピアノの鍵盤かなでて帰る

弟は郷の雰囲気漂よわせたづね来りぬ柿など持ちて

喘息にて吾伏しをれば切なくて夫は娘と買物に出づ

## 幸せなりぬ

新城 半田うめ子

石田の竹下様より貰ひしサンドイッチは味のよくして

数年の独りの生活野良猫の多く来たりてにぎやかなりぬ

本宮の湯天然温泉孫と来て楽しみてをり幸せなりぬ

同窓会沢田様には親切にして頂きたりやさしき友なり

わが友の沢田様には最近会へなくなりて淋しかりけり

西川の川辺を歩く野菊咲く友と語りつつ楽しみてをり

庭中に数本の菊植へたりき黄の色なりて朝陽に輝やく

庭中に咲きてゐるなり白きなるしやがの花はさわやかなりぬ

ピラカンサ鳥もねらわぬ草の中数多になりて赤きなる実を

## 冬来たり

名古屋 近藤映子

見降しの櫻楓の歩道の並木皆紅葉して赤々と

我夫の余命は日々に短かく成りぬ夜明の目覚めは寂し

見舞ひたる夫はテレビに首つたけ吾は足を擦るのみ

日曜日娘と共に夫見舞ふ我目をジット見詰めてくれぬ

我夫を娘と共に見舞ふとき一日一日減りたる思ひ

この月の末にはついに夫も私もじじばばと成るや

わが夫ももうすぐおじいちゃんに成る話せば眼おおきく

お歳暮を出す数も減り来たり我送るは生きてる明しか

ああついに師走十三日に夫も私もじじばばと成りたる知らせ

わが夫を見舞ひて早速おじいちゃんおばあちゃんに成と知らす

## 五井山

蒲郡 杉浦恵美子

毎夕に職員室の北の窓五井山眺めし若かりし日々

五井山の彼方に何か我が未来あるよな感じがあの頃してた

幾星霜今また我はあの頃と同じ独りぞ五井山眺めて

我が家の屋根裏どうやらハクビシン棲んでゐるらし夜中の物音

ハクビシンも葡萄樹伐採することもみんなひとりで決めねばならぬ

ハクビシン今宵何処に潜めるか雨音トタンに烈しく響く

雨烈し冷え込み厳しき今宵なりハクビシン思ひて眼<sup>まなこ</sup>涙えゆく

額縁が突然落ちぬその後は粉々に散る幾千硝子片

何方にも頼れず頼らずこの暮しアクティブどころかふはふはしてる

どこかしら無理してるよな気もしたり夫亡き後の私の日常



雲間より

豊川 平松 裕子

雲間より鋭き午後の光射し遠州灘の波に注げり

厚き雲分けて射しくる午後の陽は遠州灘の波に注げり

ドアノブの冷たさ掌に残りをり明けざる朝の闇に出で来ぬ

紐解けば乾ける音す佐渡よりのすす竹太きも細きもこき混ぜ

竹籠にすす竹数多立てかけて古りしその色店に似合ひぬ

竹林を出でて百年二百年今甦る佐渡のすす竹

経年の風格漂やふすす竹の濃きも薄きも太きも細きも

竹林の風懐しむか佐渡よりのすす竹三河の我の店先

北に西に煙よけつつ枯草を燃しゐる今日は大晦日ぞ

燃し続けなほ燃しきれぬ刈り草塚我が全身は煙の臭ひ

## バツクネル大学

豊川 山口千恵子

われの行く田の道素早く横切りてイタチならむか細長き体

昼過ぎの光を受けて輝やけり玄関脇のモミヂ真赤に

紅葉の三枚ほどを薄紙にペンシルバニアのたよりの中に

桃子の居るハリスバークはどんな街思ひつつ朝の田の道ウオーキング

バツクネル大学構内の落葉とて乾きて黄色の楓の落葉

早々と冬の日暮れゆく庭の辺に明るさ目立つ石露の黄

広げ干す大豆の莢のはじけつつ一日穏やか冬日あまねし

昨夜より冬の雨の降り続く根付きゆくらむ植ゑし玉葱

眠りゐし球根徐々に目覚めゆく水栽培のビンの中に

冬の日寒々と咲く一花のダチュラゆらゆらかすかに香る

## 「ひっつき虫」

豊川 小野可南子

我が目には見つけ得ぬまま太陽の熱に溶けたりアイソン彗星

一年生の児等は我が背に二つ三つ「ひっつき虫」とてコセンダングサの実

児童等と別れて帰る夕の道つやや明々木<sup>あかあか</sup>守り柿ひとつ

飯田線に乗るが旅の目的とトンネル続く車窓の闇を

天龍の流れに添ひゆく飯田線たゆたふ水面のエメラルドグリーン

山門の砌に赤々燃えるようドウダンツツジに今年も会えた

心臓のオベ待つ兄と並びつつ窓に半円の虹のたつ見る

ミカン一つ銜へて飛びゆく烏なり夕日に際だつその色彩<sup>いろ</sup>や良し

枝々に春待つ蕾<sup>こぶし</sup>ますぐたつ辛夷の大樹に朝の日明るし

「ロウヤ柿」と名札のつきし盆栽に小さき黄の色あまた実のつく

## 年末雑感

豊川 夏目勝弘

二十万の御節料理のニュース見つつ一汁二菜の我の昼飯

食べ残した期限切れ多き国自給率など目安にならぬ

回転ずしいまだ一度も食ひしなし今日の昼飯稲荷ずし三個

日日食べる和食が世界に認めらる一汁二菜にすごすが多し

飲食店また婦人服化粧品店多く目につく店舗なりけり

街なかに電器店を見ずなりぬ電球一つをコンビニで買ふ

我が庭よりジョウグモの見えずなり平成二十五年終りに近し

座りゐる窓より見ゆる視界より飛行機のみにて動くものなし

生き物の見られずなりし我が庭に野良猫どもがうろうろとする

弓張の低き山脈やまなみに沿ひ移る我を暖する時間みじかし

## 路面電車

「招待」 秋山逸穂

大輪の黄菊の茎は細けれどたおやかさなく風なかに立つ  
走り去る路面電車の軌道わきに黄菊白菊が並び咲きいる  
師が走りトナカイが走る十二月我は職場に座りはたらく  
池底に沈みうごかぬもみじ葉に日射し届けば朱色きわだつ  
轟音をともない光る稲妻は夜の池面を瞬時かがやかす

## うま年

横浜 阿部 淑子

冬至の夜湯船いっばい身を伸ばしゆずの香りに包まれし我  
奥津城に参りて見上ぐ天空は紺碧にして木立荘厳  
古風なる旧家の前の長き道手入れし庭は新年を待つ  
今夜はね忘年会よと立ち寄りし激務の娘送りて安堵す  
七回目のうま年迎えパカパカと走り進まんうまき年をと

# 光を放つ

豊川 白井信昭

西吹ける浜の風車はひもすがら回り回り光を放つ

門を出で野風のなかをゆくわれに野焼の煙流れくるなり

雨降りの夕方は直ぐにやっつて来る街灯灯る午後四時十分

## 贈呈誌

新聞を読めと生徒にいふ吾の夕べのポストに朝刊のあり

△秋田アララギ 一月号

東海林諦頭

慎重に谷のせせらぎを越えて来ぬ見ればしづかに揺るる日かけ

△冬雷 十二月号

山崎英子

午后六時四十分スカイツリーの上の位置十六夜月の輝き始む

△秋楡 十二月号

三宅千代

コート着せて朝の散歩に犬とゆく家族とうもの消えしわが家

△柗 十二月号

阪井奈里子

おおいなる花にふさわしき実をもちり秋づく寺の泰山木は

△愛媛アララギ 新年号

住田 鈴

さ庭べにつはぶきの黄の色さえて霜月の庭少し華やぐ

△群山 十二月号

八木 純

宵々の吾が水撒きに滴して庭のユズの実つぶらにみのる

△鹿児島アララギ 十二月号

千葉源治

晩秋に草刈り終へて砥石持ち鎌研ぐ時の心安らぎ

△檜の木 十二月号

山田久二

足の爪手の爪切りて磨りならし座椅子にひとときの吾の平安

△高知アララギ 十二月号

小松桂子

△穂の原 十二月号

鈴木せつ

秋の日はつるべ落しの釣瓶をば知らぬ娘と井戸しらぬ孫と

## 「歴代天皇御製歌」(二十一)

賈名海屋資料館

『桓武天皇』第五十代・在位七八一年(四十五歳)―八〇六年(七十歳)

桓武天皇は、天智天皇の曾孫にあたられる。首都を山城の長岡京におかれ、後(七九四年)京都に遷<sup>うつ</sup>され、これより「平安時代」のはじまりとなる。

勸解由使を設置し、國司の監督を強化、天皇による政治を行った。

仏教に対する天皇の信仰は篤く、最澄、空海を重んじ、最澄と空海は共に唐に渡り、最澄は天台宗を、空海は真言宗を持ち帰った。

此の酒は おほにはあらず 平かに 帰り来ませと いはひたる酒

桓武天皇が遣唐使を派遣するにあたり、旅立ちのはなむけに詠まれた歌。

この酒は、いいかげんなお酒ではありません。無事帰って来られるよう、神様の祝福を受け、お守り下さるお酒なのです。

『ハルカ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

若きらはエスカレーターに急ぎゆく足きたえむと我は階段に

潮満ちて稲生の浜の船いくつしろじろの月にせり上がり浮く

山崎 俊子

とめどなく嵐の雨は降りしきるこの長き夜は明けぬ気にして

母親の魔女の扮装に驚きて孫はハロウィンに慌て逃げ出しぬ

水野 絹子

幕開き舞台に向かひて手を振れば孫ははにかみそつと合図くるる

わが畑に取れたる野菜入れし箱の空のダンボールもらひて帰る

牧原 規恵

何事も無かったかのやう夕暮るるこの広瀬川を夫と眺めをり

あの角を曲がればいつも見えてくる山茶花の白き花咲く散歩道

稲吉 友江

下校らし中学生らの声がる思はず向かふかつての天下坂へ

岡崎のシビックホールに「グラナダ」の響きくるかなスペインの曲

鈴木美都子



遷宮の出雲大社に詣でたり袴姿のわが幼と共に

取り立ての初大根を持ち帰り悦に入りたるわが夫の顔

仰ぎみる東京駅の赤レンガその下道歩く女子会われら

使はれぬ宿の茶室に山茶花の活けてありけりここに母と一服

戸甫井の坂自転車漕ぎつつ追ひ越しゆく高校生の背中逞し

冬雨ふるけふも大根を煮てをりぬことと音またことと

よかつたよと言はれ一言ひとうれしかり「一期一絵」の記念展終はる

記念展終へてただよふ寂寥感はじめの一步と師の声がする

夫とゆくサイクリングの足停めむ鴨の羽音するこの海の辺に

ご近所にいいねと言はれ故里の母笑顔増しつつ建前の今日

吉見幸子

牧原正枝

岩瀬信子

石田文子

森厚子

『俳句』

老犬に歩幅あわせし冬帽子

植村公女

黄落をつつきつてきし笑顔かな

少年の片耳ピアス冬の虫

本能にまかせて鳥の渡りくる

一石

眠る山春の支度の中にある

冷酷な時の流れや越年す

『かさね』の一句 一月号

海底にレアメタルとや文化の日

佐藤喜仙

帆柱の金属音や空高し

松本周二

もず猛る姿とらへし道路鏡

古川千鶴

いつの間に猫見ぬ庭や冬ざるる

川井素山

餌付けされ人待つ猫に冬来る

田島昭久

朝市を抜ければ黒し冬の海

小池清司

日だまりの瑠璃戸にとまる冬の蠅

長久保郁子

達磨忌やテニス壁打ち延々と

岡野 安雅

晴天に心を澄ませ秋を聴く

山 本 草 風

人の皆慌ただしげや三の酉

青 木 英 林

煮汁染む大根ホクホクもう一献

丸 山 醉 宵 子

蕎麦蒔いて刈らず鋤込む転作田

池 内 と ほ る

ぷつぷつと椎の実踏むや下山道

田 中 清 秀

杜の道団栗混じる砂利の音

森 岡 陽 子

ままごとの子等に好かれてお茶の花

小 柳 千 美 子

浮き草に翅を休むる赤蜻蛉

和田勝信

白山に掛かる笠雲冬近し

後藤克彦

戸が開き木犀の香に目覚めたり

橋本修平

鐘の音の響くや古都の薄紅葉

吉田博行

老いてなほ清貧誓い温め酒

長島清山

指先も背筋も伸ぶる御遷宮

柳田皓一

## 私の一首

坂道を漕ぎ上がるより漁火が駿河湾から我取り囲む

鈴木孝雄

平成25年11月号より

八月二七日夜いつもの様に沼津御用邸記念公園の暗い松林の中自転車を漕ぎ、坂を上がって海岸縁の道に出た。視界がバツと開け目に入ってきたのは、無数の漁火。まるで自分を取り囲むようでその迫力に圧倒された。美しいと言うより恐ろしさを感じて詠んだ一首。

この季節、我入道から獅子浜にかけての駿河湾は太刀魚漁が盛んで、漁師舟に遊漁舟が加わり夜釣りで賑わう。この日は漁場が岸に近づき、ひときわ漁火が明るく見えた。

工場の終業時刻に待ち合せ玉蜀黍を裏門に売る

内藤志げ

まだ会員でも無い私は福田さんに伴なはれアララギ歌会に。農業を生活としている私には常にお金と向き合い歌の様な事もいたしました。初めてのお邸の会場自分は何が何やら分らなく御津先生に、津之地先生にも歌はこれでよいとおっしゃられました。後で福田さんに初めての人にはやさしいよ、なるほど。

生活に追われ限りの時間に書く原稿は誤字脱字御津先生もよく私を見放さず面倒を見て下さいました。感謝感謝。

一定のリズムに落つる雨しづく我が脈搏と同じなりけり

夏目勝弘

芭蕉の言葉の一つに「有限なる世界に生きそのなかに、無限なるものを発見すること」。

今たしかに有限の世界に生きている。胸に手を当てれば脈搏が伝わってくる。

雨が止めば雨のしづくはなくなる、自分のこの脈搏もいづれは止まるときがくるが、生き続ける生命が有ることを信じている。

目覚めた闇のなかで聳る音を聞きながら思いをめぐらせていた。

子を思ふ親の心を詠みましし三十路の母の遺歌集しのぶ

林伊佐子

私の母は小学校五年の時に亡くなりました。遺言を守って母親代りに妹や弟の面倒を見ました。四人の子供を残して亡くなった遺歌集は、子供の成長や、農業の歌です。「いつまでもあると思ふな親と金、ないと思ふな運と災難」。この一首が心に深く残っています。

若い時、突発難聴になった時挫折しそうになりました。無心にお乳を飲む息子の笑顔にすくわれました。子を思う亡き母の気持ちが伝わり一首にしました。

## ある自然科学者の手記 (21) 大橋 望彦

### 『簡素なお参り』

平成26年正月3日に、妹の弓子親子たちが奥多摩まで遣って来た。代々木八幡様に初詣をして、その際、お守りを授かってきて呉れた。『健康祈願』だそうで、誠に有難く、是さえあれば、今日は安心して『沢山スコッチ・ウイスキー（干支の午に因んで、ホワイト・ホース）が飲めるぞ！』と言ったらば、叱られた。

今年は今歳なので、歳男（昭和5年生まれ84歳）であるが、別にそれだからと言って何か変わる訳でもなく、唯、独り暮らしの寝正月を暢気に過し、時代劇の大型版をテレビで観て楽しんだ。ストーブで部屋をガンガン暖めて、干し芋を焙り、小さく千切っては肴にしてチビリ

チビリとウイスキーを嗜み、窓外の晴れ渡った山々を眺めながら、ふと、初詣の情景を想像した。

眼に浮かぶのは神社の風景で、大師様等もあるのであるが、やはり正月は神様の方が仏様より似合うような気がする。参拝するのに列となつて、ゾロゾロと悠つくり進むのは、もう辛い。やつと三の鳥居を潜った頃には寒くてもう帰りたくなつている。神社の拝殿には大きな鈴が吊るしてあるが、正月には其処まで到達するのは困難で、鈴鳴らしは省略する。本当は、この鈴を鳴らして神様に、『お参りに参りました』と告げる意味合いがあるのに、省略しても、神様はこの日は出さず張りなので、宜しいのであろう。神前で、一揖いちげつ二礼二拍手にげしめいちげついちげつ一礼一揖と拝むのが正式なのであるが、是も省略、お賽銭を投げて、パチパチと二拍手一礼で了えてしまう。実に簡単である。大勢の参拝者であるので、正式に行なっていたら叱られ



そうである。特に祝詞を唱える暇などは毛頭無い。この『天津祝詞』は、神主さんが恭しく唱えるのが普通であるが、実の処、何の事やらさっぱり判らないので、一寸調べてみた。次のようなことが唱えられている。

高天原に神留まります

神漏岐 神漏美之命 以ちて

皇御祖神 伊邪那岐之大神

筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に

身禊祓い給ひし時に 生坐る祓戸の

大神等 諸々の禍事 罪穢を

祓へ給へ 清め給へと申す事の由を

天津神 国津神 八百万の神等共に

聞食せと 恐み 恐み 申す

何と言うことは無い。日本を創った神様を始め、諸々の神様に集って頂き、『来て、来て、色々なお願い事を聞いて下さい。』と言っている様なものである。微笑ましいと言えば良いのだが、凶々しいとも言えそうな祝詞なのである。まあ、それを省略するのだから良い事としよう。

このように省略が簡素化に役立つならば、何卒、首相の靖国参拝が国際交流を乱して、余計な物議を醸しているのであるから、それを簡素化したらば如何であろうか。終戦記念日に、忠魂碑に参拝し、『不戦の誓い』をすれば、それで良いのではないだろうか。その方が、神様は怒らないと思うが……。

## 絹の話 (39)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 世界の繭生産の現状

近年の世界の養蚕業の推移は、どの国を見ても経済発展とは逆に衰退して行く傾向にあります。それは日夜分たず餌を食べる蚕を育てる労力と繭の販売価格が合わないからに他なりません。

### 【日本の推移】

日本では昭和40年頃から関東以西の太平洋に面した経済成長著しい諸県から急速に養蚕農家が減少してゆきました。会社勤めの方が良くなったからに他なりません。政府はただ手を拱いていた訳では有りません。各県の蚕糸試験場や農林省の蚕糸昆虫研究所等を通して病気に強く、収量のよい蚕や桑の品種改良、稚蚕の飼育、人工飼料、遺伝子組替え、手厚い補助金等様々な方策をこうじて来ましたが、衰退を止める事は出来ませんでした。農業環境も農地整理、灌漑事業、それに伴う補助金などにより、水田や果樹園、温室野菜や花にと時代に合った作物に転換して行つたのです。

一方、水利が悪く、働き口の少ない関東甲信越以北の

地帯が養蚕を続けていましたが、企業の地方分散政策、道路交通網整備と家用車の普及等により後継ぎが外の仕事につき、養蚕農家が減少して行き、補助金廃止となりこの地域でも急激な衰退となりました。

その間政府は日本の世界に冠たる養蚕技術を国外移転すべく東南アジアや南米各国にお金と技術者を投入して来ましたが、成功したのはタイとブラジルくらいのものでした。インドやネパールの様に日本のノウハウが国民性に合わなく、プロジェクト期間が終わると元の生産体制に戻ってしまう事が殆どでした。

その国々のマーケットが日本の絹の様に精密工学を駆使したような均一な絹を求めていないのと、それに伴う勤勉な労働に向いていない事でした。

中でも最も難しいのが温度管理です。特に吐糸する時の温度が日々朝晩1℃以上の乱高下が有る様ですと、蚕の首振り運動量の差が大きくなり、不均一な糸になります。日本の和装屋さんが求める絹は、吐糸温度が $21^{\circ}\text{C} \pm 0.5^{\circ}\text{C}$ の春の桑を食べて出来た糸なのです。

日本のこれらの試みは失敗と言えるでしょう。

最近日本の絹を再興すべく「日本の絹」マークを作り、各種方策をこうじていますが、あまり期待できません。

### 【諸外国の現状】

ブラジルは日本の大手企業の現地法人が繭生産をして良質な繭を中国に次いで日本に輸出して来ましたが、目覚ましい経済発展に伴い、養蚕業から撤退が始まりました。

中国でも沿岸地域の経済発展が著しく、生産地は奥地へ移っています。それでも繭生産だけでは採算が難しく、桑園の中に池を作り、副産物の蛹を餌に鯉や鯰を飼ったり、様々な工夫をして採算ベースを維持し、世界の80%を作っています。

タイは古くからタイシルクと呼ばれるカンボージュと云う柔らかな黄繭（家蚕）で織物を作り、世界中に販売して来た歴史があります。タイシルクといえば「ジムトンプソン」といわれるくらいの世界的ブランドを作り上げました。一方日本に留学生を送って積極的に収益のよい日本の繭づくりも取り入れています。

タイは東南アジアのデトロイトと呼ばれる工業国になりましたが、山間地域では米づくりの間の隙間産業として大きな柱となっています。

また、日本では原料不足で操業出来なくなった日本最大の製糸工場をチェンマイに誘致して現地法人として操業しており、この工場には周辺諸国からもそれぞれの需要に合った良い糸（近代織機にかけられる均一な糸）を作るために原料が持ち込まれ、再輸出されています。

インドの養蚕業は中央にも各州政府にも染織大臣が置

かれ、大事な基幹産業です。

しかし国内マーケットが広く深く、世界第2の養蚕国ですが、国内生産では需要に満たず、かなりの量を中国から輸入しています。国内雇用を安定させるため繭や糸等の原料輸出を認めていないのですが、布は世界中に大量に輸出しています。釈迦の着ていた様な目視出来ない薄物から厚物まで、手織りや近代織機を駆使して世界の要望に対応しています。

### 「ウズベキスタン、トルコ、マダガスカル」

中央アジアの養蚕業は高級な絹絨毯の原料として今日も盛んですが、国際相場を左右する程の量ではありません。繭として日本にも輸入されています。

ラオスなど東南アジアのどの国でも繭は自家消費的に作られています。いづれも大規模なものではありません。各国政府は貧困地域対策事業として養蚕業に取り組みもうとしています。が、なかなか手が廻らないのが現状です。マダガスカルは古くから今日まで事業的に繭生産が続けられています。が詳細な報告がありません。

世界の趨勢は絹などの天然繊維から季節を問わず、計画通りに生産出来る化学繊維へと止まる事を知りません。

## 物理学者と詩歌の世界 (49)

一石

### フリーマン・ダイソン

フリーマン・ダイソン (Freeman John Dyson、1923-) は、英国バークシャー生まれの米国の理論物理学者、宇宙物理学者 (参考資料1)。

幼少期から数学的才能を発揮。ケンブリッジ大学のトリニティカレッジにて数学を学ぶ。卒業後は物理学に興味を持ち米国コーネル大学大学院へ留学 (1947)。この年、相対性理論と量子力学を量子電気力学的に統合した式「ダイソン方程式」を発表。また朝永振一郎、J・シュウインガー、R・ファインマンの量子電磁力学に対するアプローチが等価であることを証明してこの学問分野の完成に大きな寄与をなした。1951年コーネル大学教授、1953年からプリンストン高級研究所教授。1957年米国に帰化。現在プリンストン高等研究所名誉教授。ローレンツメダル (1966)、マックス・プランク賞 (1969)、エンリコ・フェルミ賞 (1993) などを受賞。

ダイソンは量子電磁気学や重力理論等の純粋物理での研究に加え、純粋数学、地球外知的文明、原子炉設計、核軍縮問題など幅広い学問分野に活動領域を広げた。

純粋数学分野ではトポロジー、解析学、数論やランダム行列などで注目すべき業績を挙げている。ランダム行

列の研究は後にリーマン予想の研究を活発化させる契機にもなった。素数に関するオリヴィエ・ラマレ定理の証明も、ダイソンが発見した補題が重要な役割を果たす。

宇宙の究極的運命にする物理的考察の先鞭をつけたことで広く知られている。恒星の全エネルギーを利用する「ダイソン球」の概念 (注1) や、彗星を覆う巨大植物「ダイソン・ツリー」 (注2)、遺伝子工学の産物でヒヨコほどの大きさで機敏に活動する宇宙船「アストロチキン」、惑星・恒星をも移動させる装置など、気宇壮大なアイデアを次々に提唱した。

日本でも多数の読者を得た一般向け著書に『宇宙をかき乱すべきか』、『ガイアの素顔』などがある (参考資料2)。ダイソンの言葉は、科学のみならず、哲学、芸術、宗教等への深い造詣に裏打ちされ、科学・技術のあり方、ヒトという種の未来について叡智に満ち溢れている。

### ○『叛逆としての科学』

ダイソンは「科学に関して、唯一無二のビジョンなどというものはない」と主張する。その理由を、数学者ゲーデルによる「不完全性定理」 (注3) に基づき説明する。物理学の法則は、一組の有限の公式であり、数学的演算の公式もそこに含まれるから、「不完全性定理」は物理学の法則にもあてはまるはず。それゆえ物理学の基本方程式の範囲内でさえ、私たちの知識はつねに不完全である。

### ○『科学の未来』

科学と技術に関して来るべき人類の未来を描く。ダイソ

ンが示唆したものをいくつかを挙げる。

- 1) 失敗を含めた試行錯誤ができない技術（原発や核融合炉など）の未来は暗い。
  - 2) 科学革命は概念革命以上に道具革命への依拠が大きく、また道具は巨大計画型より小規模分散型の方が見込みは高い。
  - 3) 21世紀には、20世紀における物理学のような爆発的な進歩は、生物学（特に遺伝学と神経生理学）で起こるだろう。
  - 4) コンピュータと遺伝子工学・神経工学は融合し、いつか無線テレパシーを可能にするが、社会的障害が横たわる。
  - 5) 千年単位を超過した未来では生命は銀河系中に拡がり、相互通信すら困難な高宇宙では縄張り行動は穏やかになる。
- 『**ガイアの素顔**』
- 人類の運命は6つの異なるタイムスケール…「数年という単位での個人」、「数十年という単位での家族」、「数百年という単位での部族や国家」、「数千年という単位での文化」、「数万年という単位での種」、「計り知れない長さの地球の生態系そのもの」を生延びられるかどうかにかかっている。一人ひとりの人間は皆、このすべてのタイムスケールの条件に適応してきた結果である。だからこそ人間の根底には相反する忠誠心が宿っているのだ。人間の心理的衝動が複雑なのは、それらが複雑で互いに矛盾する条件によって形作られてきたからである。

**注1**…ダイソン球とは恒星を卵の殻のように覆ってしま

う仮説上の人工構造物。恒星の発生するエネルギー全ての利用を可能とする宇宙コロニーの究極の姿と言える。宇宙において高度に発展した文明により実現していた可能性がある。

**注2**…ダイソン・ツリーは彗星上で成長することのできる木のような仮説上の遺伝子組み換え植物。この

ような植物により、空っぽの宇宙空間の中でも、彗星（または植物自身）の中で太陽エネルギーと彗星の資源を利用して呼吸に適した大気を生産でき、それにより外部太陽系に人類の自給自足の居住地を提供できると考えられる。

**注3**…ある体系上で、有限の公式を使って演算をする場合に決定不可能な命題が必ず存在する。すなわち、それらの公式を使って真偽を証明できない数学的な命題が必ず存在する。

### 参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia : Freeman John Dyson
- 2) 『宇宙をかき乱すべきか』（ちくま学芸文庫）、『叛逆としての科学』（みすず書房）、『科学の未来』（みすず書房）、『ガイアの素顔』（工作舎）

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

十二 柴生田稔 5

孤独なりし君とぞ思ふ祖母君の乳房にすぎり眠り給ひけむを

昭和五十二年 『星夜』

洋傘を持てるドンキホーテの写象浮かび来て今夜君の生悲し

一首目は、『あらたま』の「きのこ汁くひつつおもふ祖母の乳房にすぎりて我はねむりけむ」（大正四年）を踏まえている。茂吉に続いてすぐに妹が生まれたためとはいえ、祖母の乳房にすぎらなければならなかったことを「孤独なりし」と解したのである。

二首目は、茂吉の「洋傘を持てるドン・キホーテは浅草の江戸館に来て涙をおとす」（昭和十三年、『寒雲』）という自分を戯画化した歌からの思いである。一首について茂吉は、「江戸館は浅草にある大衆向の万才館である。洋傘を持った和製ドン・キホーテが、浅草までめぐつて来て万才を聞いてしきりに涙をおとすところである。作者なども看様によつては和製ドン・キホーテの一人であるだらう」（『作歌四十年』）と書いている。

オウバアシユタイナアを慕へる茂吉の文章も泌々と今顧みるなり  
昭和五十五年 『星夜』

茂吉は大正十年十二月にパリに着き、翌年一月からウィーン大学神経学研究所で学び始めている。この初代所長が、恩師の呉秀三からも聞いていたオーベルシタインナーで、茂吉は親しく教えを受けている。この年十一月にはこの師が亡くなり、茂吉は葬送に出席している。柴生田の書く「オウバアシユタイナア」はオーベルシタインナーのことであり、茂吉の「滞欧隨筆」を読むと心にしみるというのである。

安居会に君に従ひて嵯峨沢温泉にも行きぬ茂吉と泊りしはわが始めてなり  
昭和五十九年 『公園』

茂吉の記録によると、昭和八年八月にアララギ安居会に出席し、その帰途柴生田稔と沼津から乗合自動車で伊豆の嵯峨沢温泉に行ったとある。この折りのことを詠んだ「嵯峨沢」十四首の一首目には「柴生田氏同道」と註がある。

をとめ二人にその時君と絵葉書書きぬしかして我はをとめのこと語りぬ  
昭和五十九年 『公園』

なあんだあんな連中をあれは女の肩だぞとその時我  
に茂吉は語りき

我驚きたるはその頃茂吉はその二人の歌を褒めたて  
ゐたれば

要するに茂吉は常に飄々として我には捕らへ難き存  
在なりき

この歌を詠んだときの柴生田は八十歳である。五十年  
以上も昔の嵯峨沢温泉でのことをなまなまと思ひ出して  
詠んでいる。生涯隠しておくつもりだったかもしれない  
ことをこのように詠んだのは年齢のせいだったろうか。  
暴露とまでは言わぬまでも、茂吉五十二歳、作者二十九  
歳のときの出来事である。

一首目に絵はがきを書いたとある。「をとめ」宛では  
ないが、二人の寄せ書きが山口茂吉・佐藤佐太郎宛各二  
通、堀内通孝宛一通が全集に残っている。このうち二通  
には「受持女中お歌といふ」「受持をお歌さんとぞ申し  
ける」とあり、嵯峨沢温泉での数泊が楽しかったらしい  
ことが想像される。このとき柴生田がおそらく普段から  
気になっているアララギの「をとめのこと」を話すなど、  
女性談義にもなったのだろう。一、三首目には茂吉の言  
に翻弄されたことを詠み、四首目に、結論として茂吉は  
捕らえられない、大きな人だと詠んでいる。

始めてわが歌を見し茂吉先生はこんな歌は写生だか  
らねと我に言ひたり 昭和五十九年 『公園』  
褒めるのかと思へば然らざりき茂吉先生のいつも言  
ふ写生とそれは違ひき

茂吉に入門したころの思い出であろう。結局は写生の  
理解の浅さを指摘されたというのだろう。

ほしいままに歌つくりぬし吾を気づかひて言ひたま  
ひしことも友に聞きたり 昭和十一年 『春山』  
わが歌を見捨てたまはざりし師の君を思ひてつひに  
涙ぐまじき 昭和三十五年 『短歌研究』五月号  
我は君に必ずしも従はざりきた我はわが真心を君  
に注ぎぬ 昭和五十九年 『公園』

茂吉に師事することは楽しいことと同じくらの辛さ  
を味わうことでもあったのではないか。それでも佐藤佐  
太郎、山口茂吉、堀内通孝、柴生田の四人は生涯を茂吉  
の傍らにいて学び、そして茂吉を語り継いだ。

茂吉に師事して幾十年ただ茫茫として視野は広がる  
昭和五十九年 『公園』

作者八十歳のときの感慨である。

## 楽しい時間 15

山本紀久雄

2013年12月31日

「いーとびあ」の明るいフロントに入ると、笑顔がステキな和田さんが「今日は立食ですよ」と、いつものすきとおる声で語りかけてくれる。なるほど、そうか、今日は12月だからクリスマスパーティースタイルかと納得する。

辻先生の料理三品もパーティーアイテムで、①チキンロール、②ホタテのガーリックバター、③春巻きミルフィーユ mille-feuille。フランス語で mille は「重なる」、feuille は「葉」を意味しますよ、と辻先生の補足。さすがにフランス通だなあと、これもまた納得する。

さて、グループごと三品に取り掛かる。当方は相変わらず受け身体制。そこにみどり監督から半分に切られた玉ねぎを手渡され「みじん切りですよ」といわれる。

実は、当方「みじん切り」が大の不得意で、手を拱いていると、監督の紹介で参加した中上さんが「まずは5×6本くらい横に切り目を入れましょう。でも、包丁は根元の手前で止めてね。それからたてに切り目を入れるとできますよ」と笑顔でやさしく教えてくれる。アドバイス通りに切ってみると、立派な「みじん切り」ができた。ホッとしてこれまた納得する。「いーとびあ」に参加すると納得すること多いなあ、改めて感謝する。

料理三品ができ、大皿に盛って、いよいよ立食パーティーになるが、ここで辻先生から皿の持ち方について「左手の人さし指と中指の間に皿をはさみ、グラスは同じく左手の親指

と人さし指で持ち、グラスのくる位置には料理を盛らないように」とレクチャーがなされ、全員、慣れない手つきで教えられたように皿とグラスを持つ。

しばらく経つと、左手が疲れるのか、足腰が疲れたのか、辻先生と当方含め四名しか立ち続けていなく、皆さん椅子に座ってしまい、座ったまま、辻先生へ質問がでる。

「立食パーティーでの話題はどのようなものがふさわしいのでしょうか？」

「そうですね・・・。宗教とか政治の話は避けた方がよいですね」

「具体的に何か事例として話していただけませんか」

「いろいろあるでしょうが・・・。山本さん何か話していただかせんか」

と、突然、当方にふってきた。

やはり、辻料理教室の最長老として大事にされているのか。それとも歳だから話題が豊富だろうと思われたのか。当方は、きわめて口下手で、世上の話題に疎いので、困っていると、辻先生の眼鏡奥の眼が「何とかしなさい」と催促する。仕方なく、乏しい体験ではあるが、最近、経験したことをいくつかお話したが、今一つ面白くない結果だと反省している。そこで改めて、この間訪問したロシア・ウラジオストクで感じたことをお伝えしたいと思う。

経営者勉強会の清話会が主催したウラジオストク視察旅行会（2013年10月）に参加し、現地で体験したもの。

出発前に配布されたガイドブックに「ロシア人は笑わない」と書いてある。そんなことはないだろうと思いつつ、成田からシベリア航空に乗ると、客室乗務員全員に笑顔がなない。入国係官も、絶対に笑わない。ガイドブックによると笑



わないのは、サービスピ精神の欠如ではなく、仕事中は笑ってはいけな、と教えられているからだという。だから、仕事の中のロシア人が笑わなくとも、無愛想だと思わないで下さいとも書いてある。

到着したウラジオストク空港、1999年開港、2012年APEC開催にあわせ改修し、なかなか機能的と思える中規模の空港で、日本でいえば広島か岡山空港といったところ。出迎への日本語ガイドの案内で、15分程バスで走り夕食レストランに入った。街道わきのハブみたいなどで、奥にパーティー用なのか、岩窟部屋みたいな個室があつて、そこに座るとガイドが「飲み物は」と聞くので「ビール」と多くの人が手を挙げる。

ウエイトレスがサラダ、スープ、メインがオヒヨウの蒸し料理とバターライスを次々と手早く運んでくる。結構うまい。この間行ってきたドイツよりもうまい。しかし、期待のビールがなかなか出てこない。ガイドが説明する。注文してからジョッキに注ぐので、時間がかかります。食事半ばには出で来るでしょうと。

ようやく現れたビール、グラスが様々な形をしている。そういうえばスープレ皿もそろっていない。総勢16名に対応できる容器が備わっていないのだ。

ところで、このウエイトレスは全員若くて美人で、体の線が崩れていく魅力的ラインであるが、全員口をしつかり結んで笑顔は皆無。ガイドが「テーブルで粗相してはいけないと緊張しているせいです」という。

これは、その後入ったどこのレストランも同様で、笑顔のない、若い美人女性ばかりだった。笑顔がないのは以前モスクワに行った時も同じだった。美人が多いのに笑顔はない。

折角の美形なのだから、少しは笑顔を見せたら、もつともつと美人になるだろうと思いつつ、翌日、北海道の社会医療法人北斗病院が、2013年5月に開設した「北斗画像診断センター」を訪問した。

この北斗画像診断センターは予防医療に位置づけられ、「健常者と患者の脳ドックや心臓ドックを中心とした画像診断」という業務。また、診断に使う主要機器は、全て新品で機器が輝いている。敷地面積は638.93平方メートルあり、このセンター入り口から駐車場へバスを入れると、若い美人女性が立っている。ウラジオストクの若い女性は美人だらけである。

ところが、この北斗画像診断センターの美人「ようこそ、いらつしやいませ」と流ちょうな日本語と共に、何と「満面の笑顔」である!!。絶対に笑わないというロシア女性がにこやかに迎えてくれたのだ。ロシア人でも日本人並みの笑顔があった。

聞くと極東連邦大学の日本語学科出身。ということとは、日本企業に就職すると、笑顔ができないロシア人も、滝川クリステルの「おもてなし」へ変身することができるのだ。

帰国し「いーとびあ」に行くと笑顔のお迎え、料理教室メンバー同士も全員笑顔で挨拶し合う。だから、ここでは「楽しい時間」が溢れている。日本は素晴らしいと思う。以上。



# 子規の短歌革新とアララギの歌人 (19)

佐藤 喜仙

## (三) 歌よみに与ふる書―第八回―

今月の要旨

① 今回は善い歌をとり挙げる

「悪しき歌の例を前に挙げたれば善き歌の例をここに挙げ可申候。悪き歌といひ善き歌といふも、四つや五つばかりを挙げたりとて、愚意を尽くすべくも候はねど、なきには勝りてんと聊か列ね申候。先づ『金槐和歌集』などより始め申さんとか」

武士の矢並つくるふ小手の上に霰たばしる那須の篠原

(源頼朝 以下同)

この歌は良く知られており取り上げるまでもないが、気のつかない事もあろうと思ひ取りあげた。この歌は名詞が多く、助詞は「の」字三カ所、「た」の字一カ所、動詞二個でそれも最も短い形で使われており、和歌の必須要件を十分に満たし充実しているところが良い。万葉の歌は材料極めて少なく簡單を以て勝っているが、実朝は一方では万葉を擬し、一方ではこの歌のように破天荒な歌を作っている。その力量は図りしれないものがある。

時によりすぐれば民のなげきなり八大竜王雨やめたまへ

この歌は世間の人々はあまり好ましく思わないと思うが、子規は好きで好きでたまらない歌と言っている。この歌の上三句は拙ないが、これほど恐ろしい歌はそうはない。八大竜王を叱責し、竜王も承伏させてしまうような勢がある。それは八大竜王という漢語の力強さ、雨やめたまへと四三の調べを用いたる処が、皆この歌の勢を強める働きをしている。実朝は良い歌を作ろうとして作ったわけではなく、真心をもって詠んだのが良い歌となつたのであろう。

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふ

この歌は特別に趣向があるわけでもなく平凡な歌のようには思われるが、一気呵成の処がかえつて真心を現している。又この歌は第五句字余り故に良くなっている。「思う」というのを詰めて「もう」などと詠めば興ざめもはなはだしいが、八字になつても「思う」と詠むところがこの歌を一層良くしている。最後に「子を思ふかな」「子や思ふらん」などとするのは、平凡になり子を思う切ない情が強調されるのである。

# 富士山の短歌 (5)

夏目勝弘

(ある婦人雑誌の投稿歌)

昭和萬葉集

(昭和元年～五年)

若山牧水 (明18～昭3・黒松 (13))

○あらはなる富士の高嶺のかなしけれ裾野の春の野べにあふげば

○夜には降り昼に晴れつつ富士が嶺の高嶺の深雪かがやけるかも

○天地のこころあらはにはあらはれて輝けるかも富士の高嶺は

金子薫園 (明9～昭36・光5・9)

○月夜のおぼろの富士澄みきたり澄みきはまれりわが目の前に

○原始林のうへの富士が嶺あきらけく夕ばえの代赭色に塗られて

(昭和六年～八年)

与謝野寛 (昭6～昭10)

○朝の富士晴れて雲無し何ものか大いなる手に掃へる如し

(与謝野寛短歌全集 (8))

(昭和九年～十一年)

山口茂吉 (明35～昭33・赤土 (16))

○群山をこめてしづめる雲のうへ富士の夕影とほく伸びたり

(昭和十六年～二十年)

前田夕暮 (明16～昭26・富士を歌ふ (18))

○雪あらぬ富士の全面に鬚はなし粗放厩大にして立ちはだかれり

山下陸奥 (明28～昭42・平雪)

○真赤なる富士を見むとて恐ろしきまで露のおく菜畠に立つ

(昭和二十年～二十二年)

海老沢欽三 (明34～内燃動 (27))

○村人の富士が瘦せしと云ふ言葉身にしみ足柄峠を下る

月報 (2) (まんよう) 井上靖 (今に忘れ得ぬ歌)

○命ありて帰還の途次に仰ぎたるあわれ夕暮の富士を忘れず

(昭和二十七年～二十九年)

歌人の書シリーズ⑧昭和萬葉集挿入の葉

吉野秀雄

○夏富士の濃き紫が濃き朱に燃ゆる須臾をけふ見つるかも

(早梅集・昭和22―甲州赤富士)

○葦村直彦 (アララギ・昭28・11)

○富士裾野高塚台に雨に濡れ擬砲射ちあしわれあはれなり

葛原繁 (大8～コスモス39・10)

○あげぐれの雲をとどめぬ夏の富士紺一色に空に浮き立つ

水戸嘉一 (大4～草原 (42))

○茫茫と枯草原に音たてて風わたるなり晴れゆく富士の

遠藤典太 (明36～創作・41・5)

○野の果ての富士をかくして只一つ残れる雲に日の入らむとす

後藤静 (明45～形成45・3)

○精進湖はたひらに碧し元旦の富士五合目の新雪にたつ

伊従 博 (明42～伏流泉 (50))

○街空に朝の富士見ゆ職を得し編集室のわが椅子の位置

松本常太郎 (明32～アララギ47・10)

○この年の富士の山巒雪多し乱気流の影五合目をとぶ

石井栄太郎 (明19～昭53・心の花47・1)

○空遠く富士の高嶺を眺めつつこのうつくしき祖國を愛す

堀口捨己 (明28～堀口捨己歌集 (55))

○露台に出で富士見る朝二日あり春先の富士真白なりけり

森比左志 (大6～清子抄 (49))

○雲ざれに雪ある富士のかけら見ゆ墓所決めかねて立つわれと子と

野村 清 (明40～泉48・2)

○次の代のいかなる日本を見おろすか富士の高嶺は神さびて立つ

## 「氷魚」のことから (157) 岡本八千代

冬至も過ぎた。東より刺す朝の光も西の光になりつつこの私の部屋を照らす。今年も続けて「氷魚」の稿が書けるかしら？。

子規の小説、「我が病」第三回を書こう。

第三回。従軍記者としての別れ。三月三朝朝。

出發に当たり鳴雪翁は「君行かば山海閑の梅開く」の一句を餞した。子規居士は、

かへらじとかけてぞちかふ梓弓矢立たばさみ首途すわれはと詠んだ。また、福本日南という人は、筆をとって、

えびらにも弓にもかへてとる矢立頼む心をわれはたのまん  
と和したのであった。(柴田宵曲著より引用)

○小説にもどつて。――

・余は汽車に乗った。送る人に玉井も五十嵐もいた。「ご機嫌よう」と帽子を取った。訣別かと思うほど心細くなってしまった余。悲しみに堪えないほど。」

・まず広島へ来た。さすが大本營地の雑園は非常なもので、大手町はいつも人で埋めている。

・従軍の命令を待ちながら一ヶ月餘りにここに滞在していた。

・いよいよ従軍記者一行は出發命令を受けて宇品まで出かけたこと。桜は七分咲き。

・宇品の生活。――

・従軍記者も、普通の兵士と同じきびしい扱ひであった。

「余は恐ろしいのと情けないのと二つの心に非常に不安

を感じた」

・船は夜半に出帆した。翌朝になると朝食。すべて軍隊式。船はふわふわと大ゆれに上ったり下ったりする。

・「天と水との外ほとんど何一つ無きこの大海原浮いてる者は白い鷗である」

・「此の可憐な小さい鳥を見た時には余は非常に愉快を感じた」とある。

・宇品を出て四日目、大陸の山が見え出した。その日の夕方、船は大連湾に入つて錨を下した。「そこの山も岡も皆赤はげて木一本無い。大和尚山の山も赤い。砲台も赤い。海の水まで黄色を帯びて。

・船がとまると、小さい舟、それは支那の画にあるような舳と艫との高い中部の低い小舟に一人か二人のきたない支那人が乗つて漕ぎつけて来る。……。

・翌日も一日船に居た。この日の昼飯の当番は余であった。いやいやながら飯櫃をかかえて炊事場へ行った。炊事場は狭い処にあつて、当番連で押しあいへしあいの騒ぎ。余は飯櫃を抱えたまま30分。

・飯たき殿は、早くと余を叱りつけながら飯を盛ってくれた。室に帰つてみると外の者は大概飯が済んでいた。同班の人にひどく気の毒に思った。

・余は飯櫃を抱いて甲板に立つている処を五十嵐が見たら涙をこぼすだろうなどと考えると、此の夜は十分に眠れなかつた。

以下次回へ。

## ことのはスケッチ (422) 今泉 由利

### 『貫名海屋私注』②

貫名海屋、安永七年(一七七八)三月、徳島城下西富田町一丁目角から二軒目。

吉井家二代目の父、吉井永助直好と母、矢野勘五郎常博の長女の第二子と誕生した。

父方吉井家の家系。

藤原鎌足の後裔といわれ、日蓮を祖にもつ吉井家の祖先が藤原姓であることを知る資料は、「貫名泰次郎藤原苞」と海屋肉筆記載の由緒書が残る。

海屋は、先祖の姓「貫名」を、藤原氏の末裔の意識をもち、自らの号とした。

藤原鎌足の後裔、備中守藤原共資の代、遠江国(静岡県引佐郡引佐町井伊谷)貫名郷に移住し、姓を貫名と改め、貫名四朗、四代を貫名の地に移住したが、横須賀領主、貫名四郎直行の代、家臣の謀反にあい、土佐幡多郡吉井村に、幼くして難をのがれた、吉井八郎左衛門直兼、ここに吉井家の元祖となる。

六代後、六右衛門、慶長の頃、阿波に移り後、塩の産地鳴門市に住居。塩方支配を勤め後、徳島移住。森川藤後兵衛の弟子にして「礼方」を学び、これより阿波藩主、蜂須賀侯に小笠原流の「礼法」をもって仕え、賄奉行などを兼職した。

母方、矢野家の家系。

矢野家は、初代から蜂須賀藩に仕えた料理方。海屋の母の父、五代勘五郎常博の代になり、本職の料理方のかたわら藩主からの所望に応え、飛箭丸屋形の絵、川船の絵、城廻りの絵図等を制作。絵の奉仕も行うようにはなった。

矢野勘五郎常博の長女は、吉井永助直好に嫁し、二男として海屋が生れた。

常博は、海屋の祖父であり、狩野派の絵師として名高い矢野栄教典博は、海屋の叔父にあたる。矢野家が本格的に蜂須賀藩主に絵師として奉仕するようになったのは典博からであった。

矢野家は、仏教、僧侶との関係の深い家柄で、海屋の母の末弟「靈瑞」は出家し、高野山青巖寺の住職と。最高の地位に達した。

海屋が、叔父を慕って高野山に入山したのは十七歳の時。靈瑞は四十三歳。

靈瑞のはからいにより、空海の真蹟に接し、書の研鑽に励んだ。

靈瑞の高潔な人格と人間性、偉業に接すると共に、甥の海屋の非凡な才能を見抜き、学徳、道の指導、人生観、究道の精神、将来への決意が固まっていったことだろう。

私の子供達の祖父、貫名泰比古は、海屋の曾孫にあたる。吉井家初代、吉井泰右衛門直房。吉井家の藤原の出である由緒書、海屋肉筆署名の「貫名泰次郎藤原苞」。

重い泰にであった

つづく

## 編集室だより【二〇一三年 十二月】

○プラネタリウムへアイソン彗星の様子をみとどけにゆく。

○生涯職業をもち、自分自身を支えてきた女子の集まりをしている。今回は編集室で、アルゼンチン風も混じった料理。これからを楽しく過す工夫を話し合った。

○夢のような出来事でした。宇都宮線、白岡の木下雄次郎氏邸、110年前の寄棟造りの骨太杵組みが望め、大正モダンデザインの一部屋の炬燵に入り、山岡鉄舟と佐久間象山の書に囲まれたその考察を受けたのでした。

○仏像彫刻の先生を囲み、第一回目の忘年会は立合川の「吉田屋」そば会席。創業安政三年、東海道品川宿郊外。白身の刺身の歯ごたえ。もちろん蕎麦。

○東京富士美術館の「光の讃歌」印象派展。(パリ、セーヌ、ノルマンディの水辺をたどる旅) 以前旅したところ、すばらしく描かれている感動。

○西部新宿線、上井草駅。ちひろ美術館に於て「ちひろさんの水彩技法体験」に出かけた。岩崎ちひろさんの、やさしい水彩、白抜き、たらし込み、雰囲気…。教えていただいた。

○奥多摩に雪が降ったニユース。「雪の坂道を歩く靴」を探しに出掛けた。要所でスパイクがとびだす靴をみつけた。

○「日本に住もう」と帰ってきて、一番はじめに出逢った友達。藤崎陽子さんのクリスマスパーティー。ものすごく清潔、そして美しく、美味しくってたまらない。もう十五年にもなるか、一度も欠かさず続けて下さっています。

○池袋演芸場へ。ここは椅子席だからうれしい。三遊亭歌之介さん。林屋正雀さん。古今亭交菊さんその他の方々。とにかく笑った。大声で笑ってしまった。また行きたい。

○近所の「伊勢屋」に「栗のし餅」を頼んだ。注連縄は夏目勝弘さんが毎年のように造って下さった。赤と白との万両も、赤みをおび…白っぽく…なってきた。

○お正月の支度が整ったところへ、NY日記の玉由と由野と。日本のお正月にやってきた。

○「花守」の主になる著作権の仕事仲間、仕事がら若い人達ばかりなのだけれど、なぜか私も参加している忘年会は、神泉の開花屋。限り無いほど魚料理がでてきた。限らないほど白ワインを飲んだ。もうちょっと前は、毎日こんなことしていたな。

## 和菓子街道 (88)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

### 伊勢街道(11)

津観音門前のアーケード街にあるサンカドーは、大正12年の創業。老舗と呼ぶには少し若い店ではあるが、津で最初にケーキを作ったのがこの店だ。現在も洋菓子を中心とした品揃えだが、特に注目したい菓子がふたつほどある。

ひとつは、江戸時代のままのレシピで作られている「江戸時代のカステラ」。江戸時代末期、津藩の家老・中川蔵人政寛が、江戸在府中に記した日記の中で、初めてカステラを食べたことと、その配合を書き残してくれている。原糖に近い砂糖を使用しているため褐色で、卵も少なめ。現代のカステラよりもずっとさっぱりとしている。

もうひとつは「クッキー唐人さん」。江戸時代の朝鮮通信の行列をおもしろおかしく模した津の伝統芸能「唐人踊り」で、「唐人さん」が被る



出っ歯のお面をイメージした不思議な形のクッキーだ。ひょうきんな所作の唐人踊りもおもしろいが、こちらのクッキーも実に楽しいお菓子だ。

(左)クッキー唐人さん(唐がらし、ガーリック、カカオ、バター)と、(右)さっぱりした味わいの江戸時代のカステラ

#### ◆サンカドー

住所：三重県津市大門23-1

電話：059-226-4884

## お知らせ

▽三月号の原稿は、二月一日(土)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アラギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

## 原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

この二月号が皆様のお手元に届く頃は冬真盛りの寒い毎日となっていることでしょう。冬になれば夏が恋しく、夏が来れば冬が恋しい、人間はかなり身勝手な生き物ですね。しかし、夏になれば夏の歌を詠み、冬になれば冬の歌を詠んで、本当はそれぞれの季節を受け入れ、さらに楽しんでるのではないのでしょうか。今年も四季の変化を楽しみつつ歌作りに励んでゆきましょう。

個人的には、今年はペンとメモ帳は必ず携帯して、瞬の感動も忘れぬように書き留めておきたいと思います。憶えておいて後で書こうと思っても思い出せないことがよくあります。又、二年歳を重ねたのですからなお更です。(平松)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。  
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができます。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半々年分一万円、一カ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半々年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十六年一月二十五日印刷 第六十一巻 第二号  
平成二十六年二月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘  
平松 裕子・山口 千恵子

### 発行人

今泉 由利

### 発行所

三河アララギ会  
三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二  
東京都北区王子本町一の二六の六A  
TEL (〇三)五九二四一〇六五  
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九  
E-mail yur188@cronos.oon.ne.jp  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 桜 創 美